

# 東南アジア島嶼部の環境と農業適応

—開拓地入植者にみる適応のかたち—

## はじめに

東南アジア島嶼部の地形を高谷 [1985 : 6] はおおまかに三つの地形に区分している。スマトラの脊梁山脈から小スンダ列島、マルク諸島を経てフィリピンに至る火山島、そしてマレー半島、ボルネオ、スラウェシなどの非火山島、およびスンダ陸棚を囲むスマトラ東部やボルネオ南部の島嶼低湿地である。この地形区分は、これから述べようとする島嶼部の農業の特徴を考えるうえで有効な枠組みを提供してくれる。島嶼部の農業には、自給的色彩の強い農民農業と商業的色彩の濃厚なプランテーション農業の併存や、主食となる作物の違い、栽培方法における技術的集約度の違いなど、多様な地域の変異がみられる。島嶼部農業におけるこのような多様性を、高谷の地形区分に依拠しながら、とくにインドネシアにおける開拓空間と移住者の適応という側面から捉えてみようとするのが本稿の目的である。

1980年から1985年にかけて実施された「熱帯島嶼域における人の移動と環境形成過程の研究」(研究代表者：前田成文)と題する共同調査のなかで、筆者には南スラウェシ州で3度、スマトラのリアウ州で1度現地調査を行う機会が与えられた。いずれの州でも、外部からの移住者が未利用地に入植している地域があり、彼らによって今も盛んに開墾が進められていた。南スラウェシ州へは、同州内からトラジャ族やブギス族、外からはジャワ族が移住し、一方、リアウ州へもジャワ族やブギス族が大量に移住していた。どの入植地も移住者がもともと居住していた環境とは大きく異なっている。この環境の相違を克服して、新しい環境にどのように適応していくのか、そして彼らの間で適応のかたちがどのように異なるのか、このような点を調査では明らかにしようとした。本稿

の大部分の資料はこの調査によって得られたものである。

## I 成熟した農業空間と開拓空間

### 1 東南アジア島嶼部の農業環境

「はじめに」で述べた三つの地形区分のうち、土壌の肥沃性においてもっとも恵まれているのは火山島である。スマトラの脊梁山脈やジャワ島にある火山麓は栄養分に富む中性・塩基性火山噴出物に由来する肥沃な土壌を形成している。一方、もっとも問題のあるのは島嶼低湿地である。海側に位置する汽水湿地林に覆われた土地は、陸化に伴って酸性硫酸塩土壌と呼ばれる強酸性土壌となる。また、その内陸側にひろがる淡水湿地林には厚い泥炭層が分布し、この土壌も貧栄養と酸性条件のため農業的には恵まれていない。いわゆる問題土壌に覆われる島嶼低湿地は、従って、島嶼部のなかではもっとも農業に不適な土地となっている。非火山島の土壌の肥沃性はこれら両者の中間に位置し、その程度は地域によりかなり異なる。強いポドソル化をうけた丘陵地の赤黄色土は、塩基の溶脱のために栄養分に乏しく、栽培管理を誤ると森林を伐採した跡地での永続的な作物栽培は困難である。一方、石灰岩地域や山間の盆地、河川沿いの沖積地には比較的栄養分に恵まれた土壌が分布する。

この三つの地形区の肥沃度の差異は、そこで行われる農業の技術的な集約度にも影響する。もっとも肥沃な火山島では、水田と畑の高度な土地利用体系が成立し、作付の多毛作化を実現している所が多い。典型的な例はジャワ島やスマトラ島の西スマトラ州高地にみることができる。一方、島嶼低湿地では、汽水性、淡水性低地ともに大部分は森林で覆われている。もともと農業的には湿地焼畑によるイネ栽培やサゴヤシの採取が行われていたにすぎず、むしろ森林産物の採集を主な生業とする人々が多かった。非火山島では、山地は深い森林に覆われており、いまでも焼畑耕作が行われている。一方、肥沃な盆地や河川沿いの低地では古くから水田耕作が営まれ、火山島と同じく集約的な稲作が行われる。非火山島では、従って、その立地に応じて様々な段階の農業が展開して

いる。

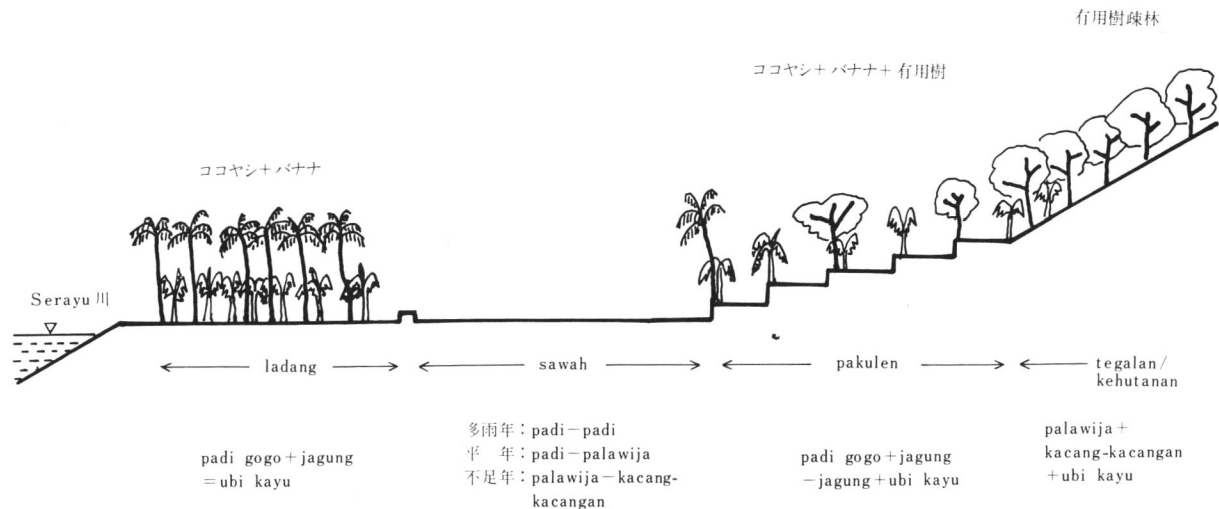
## 2 成熟した農業空間：移住者を生みだす空間

ここで成熟した農業空間というのは、集落とそれをとりまく耕地や林地の複合された景観が安定した趣きをかもしだしている地域である。古くから人々が住みつき、よく手入れされた耕地、園地、屋敷地が一定のまとまりと安定を感じさせるような落ち着いた眺めをもつ地域である。こういった景観は、火山麓や非火山島の山間盆地でよくみられる。成熟した農業空間が農業技術や環境への適応の面でどのような特徴をもつのか、ジャワ島の中ジャワ州、および非火山島であるスラウェシ島の南スラウェシ州を事例にみてみよう。

まず中ジャワ州の事例として、同州西部プルウォクト (Purwokerto) 郊外の天水田と畑の混淆地における耕地と作付体系の様子をみてみよう。次頁図1の概念図で示すように、スラユ (Serayu) 川に沿った河岸段丘と丘陵地からなるこの地域では、耕地は次のように立地している。川岸に近く、ときに洪水に見舞われる耕地がラダン (ladang) で、ここにはココヤシとバナナが河川に直角方向に列上に栽植されている。続いて天水田があり、さらにその上の丘陵地山脚部は緩い傾斜の段畑 (pakulen) となっている。ラダンと同様、段畑にもバナナやココヤシが畦に植えられている。段畑のさらに上は丘陵地で、バナナや様々な有用樹からなる疎林となっている。

以上の耕地における年間の作付順序は図1の下部に示したとおりである。ラダンや段畑では混作ならびに間作様式 (tumpangsari) が広く行われる。丘陵地斜面の有用樹の疎林にまで作物が栽培され、ここでも永年生樹木と短年生作物が混栽される。キャッサバの栽培は、雨季の終りから乾季が主体である。降雨の減少に対応して、比較的耐旱性のあるキャッサバを間作し、耕地の集約的利用をはかっている。この例にみられるような、畑作物の混作、永年性作物 (樹木) と畑作物の混栽は、ジャワ島内で広くみられる作付様式である。

一方、水田では、降雨の変動に対応した作付順序がみられる。降雨の十分な年には水稲の二期作が行われ、不足年には水稲を栽培せず、水田はいわば畑と



注) padi; 水稲, padi gogo; 陸稲, jagung; トウモロコシ, ubi kayu; キャッサバ, kacang-kacangan; マメ類, palawija; 普通畑作物。  
-は前後作の, +は混作の, =は間作の関係を示す。

図1 中ジャワ州 Purwokerto 郊外の耕地利用と作付体系

して利用される。水稲の栽培様式だけを見ても、降雨の条件、とくに雨季開始時期や雨季期間中の降水量の多寡によって、様々な様式が採用される。雨季が遅れた場合には、padi gogo rancah と呼ばれる乾田穴播き栽培が行われる。また、二期作目の水供給が十分に期待できない場合には、一期作の刈取り後直ちに不耕起移植する栽培法 (padi walik jerami) が採られる。また、水不足年には水田で陸稲を栽培 (padi gowah) することもあり、水田の利用法は多岐にわたっている。以上のように水の供給 (降水量や灌漑) によって規制されながらも、水田の作付強度をできるだけ高め、それを高度に利用しようとするところにジャワの水田農業の特徴をみることができる。

水田や畑の他に、屋敷地 (pekarangan) においても作物が栽培される。集落を取り囲む屋敷地は多数の果樹や有用樹で覆われている。その樹木類の下には日常の食料や薬料、あるいは家内工業の原料となる多種類の野菜や有用植物が栽培される。「生きている茶店」(warung hidup)、または「緑の薬局」(apotik hijau) [LBN 1979:11] とも呼称される屋敷地は、それ自身が有機的な生態系をもち、農家の自給経済に大きく貢献している。

次に、南スラウェン州各地の水田や畑における作付体系 (次頁図2参照) をみてみよう。中ジャワ州の場合と同様に、水田、畑ともに多毛作化されている所が多く、とくにトウモロコシの占める比重が高くなっているのが特徴的である。水田では、プレモンスーン期やポストモンスーン期のトウモロコシ作が盛んである。畑ではトウモロコシが基幹作物の位置を占め、他の作物と混作される。南スラウェン州の東南部は伝統的にトウモロコシを主食とする食文化圏にあり、同州全体をみても、トウモロコシ基幹の作付体系が広く行われる [渡部; 田中1984:115]。

図2には含まれていないが、同州北部のタナ・トラジャ県の水田の作付も非常に労働集約的なものである。とりわけ、水田農業を生業の主体とする同県のマカレ、ランテパオなどでは、盆地の谷底水田や斜面の棚田が一体となって集約的な水稲栽培が行われている。例えば、マカレの南、メンケンデック郡で調査を行った山下 [1982:383-388] は、雨季の始まる12月からの田起こし、2月

地域	地形	耕地	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
西岸地域														
Bantimurung	山地	天水田	===== padi sawah =====			===== kedele =====								
"	"	畑 I	===== kedele =====			===== jagung =====			===== jagung =====			===== padi gogo =====		
"	"	畑 II	===== padi gogo =====			===== jagung =====								
中央低地														
Sidrap	盆地	灌漑田	=====			===== padi sawah =====			===== palawija =====			===== padi sawah =====		
南岸地域														
Tamalatea	丘陵地	灌漑田	===== padi sawah =====			===== palawija =====								
"	"	畑	===== jagung =====			===== jagung =====			===== ubi kayu =====			=====		
東岸地域														
Sinjai	海岸段丘	天水田	kacang tanah=====			===== padi sawah =====								

注) 作物名は図1を参照。図中2行にわたるのは混作を示す。

図2 南スラウェシ州における作付体系(順序)の事例

の田植え、そして8、9月の収穫に至るまでの周到な稲作作業とそれに伴う農業儀礼を報告している。広い谷底平野に水田の広がるマカレヤランテパオでも同様な作業が行われている。谷底の大区画の水田では直播栽培されることも多い [Takaya & Tanaka 1982]。また、近年、水稻の二期作も導入され始めている。

成熟した農業空間の例としてあげたこれらの地域に共通してみられる技術的な特徴は、まず第一に、安定した耕地利用が実現されている点である。そして第二には、その耕地において周到な栽培管理を可能にする栽培技術が成立していることである。それは気候の変動、とくに降雨の変動に対処して様々な作物と栽培法を選択するだけの技術的対応が可能な条件を備えていることでもある。

ところで、環境の農業的利用において、耕作可能な土地を余すところなく利用しようとする技術的基盤を持つがゆえに、安定した農業空間は、一面では、もはや余剰の土地を持ちえない、常に過剰な人口を生み出す空間でもある。ジャワ島における人口の稠密さとジャワ族の島外への移住はすでによく知られている [McNicol 1968 : 51-60] が、南スラウェシ州にも同様な条件を内包している地域が多い。表1は、南スラウェシ州各地の人口密度と耕作面積の規模別にみた農家戸数を示したものである。同州でも比較的人口の稠密な地域を列記したもので、比較のために中ジャワ州の数字も示されている。南スラウェシ州で比較的人口の稠密な地域は、都市部を除けばいずれも山間の盆地や沖積地、そして同州南部の火山麓である。こういった地域では、耕作面積の小さい農家が多く、経営規模においてジャワ的な状態にある地域が多いといえよう。ブギス族の島外への移住、出稼ぎはすでに17世紀から始まる彼らの伝統 [Lineton 1975: 174-177] であるが、その基盤には、環境に対するこのような人口圧があったことも見逃がせないであろう。島嶼部において、成熟した農業空間は、すなわちそれ自身によって支えてきた人口を常に排出する空間でもあったといえよう。その排出された人口が行きつくところ、すなわち開拓空間の農業環境について次にみることにしよう。

表1 南スラウェン州各地の人口密度と耕作面積別の農家戸数

県名 郡名	農業賃労働者 戸数 (%)	農家戸数 (%)	耕作面積 (ha) 別 農家戸数割合 (%)			人口密度 (人/km <sup>2</sup> )
			0.25未満	0.25~0.5	0.5以上	
南スラウェン州	36,845 ( 3.3)	734,753 (65.8)	19.9	28.6	51.6	83
<u>Bulukumba</u> Hero Lange-Lange	154 ( 3.4)	3,768 (84.2)	25.5	36.6	37.8	342
<u>Bantaeng</u> Bantaeng	333 ( 4.9)	4,286 (62.9)	17.5	38.6	43.9	547
<u>Jeneponto</u> Tamalatea	255 ( 2.4)	9,420 (89.0)	23.4	38.1	38.5	379
<u>Gowa</u> Bontonompo	1,079 (12.2)	5,955 (67.1)	34.5	36.0	29.5	791
Bajeng	1,156 (12.0)	6,958 (72.1)	37.6	34.3	28.0	644
<u>Takalar</u> Galesong Selatan	533 ( 8.4)	3,287 (51.8)	34.5	40.4	25.1	810
<u>Bone</u> Pallakka	— ( — )	6,355 ( — )	45.1	26.5	28.4	219
<u>Maros</u> Camba	114 ( 1.6)	6,773 (96.0)	33.5	39.7	26.8	79
Maros Baru	584 ( 4.0)	8,448 (57.9)	26.9	35.9	37.2	190
<u>Pangkep</u> Bungoro	461 ( 9.3)	3,663 (73.8)	28.8	40.8	30.5	245
Labakkan	304 ( 4.7)	4,646 (72.2)	27.4	30.5	42.1	347
<u>Wajo</u> Tempe	242 ( 3.1)	1,163 (15.0)	29.2	39.6	31.2	1,197
<u>Tana Toraja</u> Makale	— ( — )	6,319 (88.6)	50.3	31.8	17.9	321
Rantepao	843 (18.6)	2,166 (49.4)	40.4	40.4	19.2	768
Sanggalangi	11 ( 0.1)	9,117 (84.9)	52.3	27.4	20.4	183
中ジャワ州	1,736,629 (32.9)	3,145,968 (59.5)	39.9	32.1	28.0	742

出所：Biro Pusat Statistik (1981) Penduduk Indonesia Menurut Propinsi: Seri L, No. 3, Hasil Pencacahan Lengkap Sensus Penduduk 1980.

Kantor Statistik Propinsi Sulawesi Selatan (1981) Penduduk Propinsi Sulawesi Selatan 1980: Hasil Pencacahan Lengkap.

注 1) 農業賃労働者戸数および農家戸数の ( ) 内の数字は、ともに全戸数に対する百分比。

2) 耕作面積別農家戸数割合の百分比は、全農家戸数に対する百分比。



### 3 開拓空間：移住者を受け入れる空間

前述したように、島嶼低湿地は、その問題土壌のゆえに農業には不適な土地となっている。また、海岸に近く、低標高に位置するため、逆水の貫入や洪水の滞水など水文的にも問題をかかえている地域である。すでに述べたスマトラ島東部やボルネオ島南部の低湿地のみならず、その他の島々の海岸部にも小規模ながら同様な低湿地が分布している。

このような低湿地はかつては森林産物採集民と漁撈民の活動の場であった。もっとも海岸に近いマングローブ林は、用材や薪炭材あるいはタンニン原料の採集に利用され、その内陸側に分布する淡水湿地林や泥炭湿地林も用材の伐採や籐の採集に利用されるにすぎなかった。これらの森林のうち比較的早くから農業的に利用されたのは淡水湿地林である。すなわち、湿地林を開いた焼畑移動耕作やサゴヤシ栽培がこの地域での唯一の農業的土地利用であった。そして、外部からの移住者が最初に開拓にとりついたのもこの淡水湿地林からである。彼らは、湿地林を伐採し、水稻や陸稻、トウモロコシを焼畑で栽培し、徐々にその土地を定着農耕の場に変えていった。今では、大部分の淡水湿地林は伐開され、集落や水田として利用されるようになり、移住者による開拓は、これまで農業的には全く利用されてこなかったマングローブ林や泥炭湿地林にまで及んでいる。

こういった開拓空間にオランダ植民地政府によって最初に大量の移民が送りこまれたのは1905年のことである [Pelzer 1945:192, Hardjono 1977:16]。ジャワ島の過剰人口に対する解決策としてスマトラ南部のランポン州グドン・タタアン (Gedong Tataan) への入植に始まったこの政策は、結果的にはジャワの人口過剰には何らの解決とはならなかったものの、ランポン州を中心にスマトラの各地 (南スマトラ、ジャンビ州など) へ、そして1930年代末からは南カリマントンや南スラウェシへ大量の移住民を送りこんだ。Hardjono [1977:20] によると、1940年末には、政府援助を受けずに入植した者、および入植地で出生した者を含めて、各地の入植地の総人口は20万余に達していたという。第二次大戦後、インドネシア政府は新たな移住政策 (Proyek Transmigrasi) を実施し、

表2 出生地別にみた南カリマンタン、リアウ、ジャンビ、南スラウェシ州への移住者総数 (%)

出生地	現 住 地							
	南カリマンタン		リアウ		ジャンビ		南スラウェシ	
	1971	1980	1971	1980	1971	1980	1971	1980
スマトラ	3.7	4.1	42.4	49.6	33.6	29.0	6.0	9.9
ジャカルタ	1.1	1.3	1.7	1.6	0.6	0.9	1.2	3.5
西ジャワ	10.8	8.1	2.4	2.7	9.5	4.4	7.2	6.0
中ジャワ	21.0	23.7	12.1	12.4	18.8	34.5	10.3	16.8
東ジャワ	32.9	41.4	21.2	13.3	8.3	11.8	30.0	17.9
カリマンタン	13.4	12.4	2.9	1.3	2.1	1.0	3.7	4.5
スラウェシ	14.4	7.2	9.5	15.4	24.2	16.6	26.9	18.5
その他	1.0	0.9	1.6	0.8	0.3	0.5	18.7	17.6
国外	1.7	0.9	6.2	2.9	2.6	1.3	—	5.3
合計	100	100	100	100	100	100	100	100
移住者総数	67,285	143,958	217,100	353,194	160,000	297,054	71,411	114,085

出所：1971年の数字は、Biro Pusat Statistik (1984) Analisa Migrasi Indonesia Berdasarkan Data Sensus Penduduk 1971 dan 1980, 1980年の数字は、Biro Pusat Statistik (1983) Penduduk Indonesia, Hasil Sensus Penduduk 1980: Seri S, Nomor 2 による。

注) 各州とも、同州内からの移住者は含まれていない。ジョクジャカルタ特別区は中ジャワ州に含まれる。その他は、バリ、スサ・トゥンガラ、マルク、イリアン・ジャヤなど。

1950年以降、主にスマトラ、カリマンタン、スラウェシへ大量の移住民をジャワ、バリ、ロンボックから送り出しており、今もこの政策は続けられている。

このような政府援助のもとに入植した移住者 (transmigran umum) の他に、それに頼らない自発的な移住者 (transmigran spontan) も開拓空間に多数入植している。なかでも、ジャワ族やブギス族の南カリマンタンや東スマトラへの移住はとりわけよく知られている [Collier 1980: 12-35]。表2は、1971年と1980年人口センサスから、南カリマンタン州と東スマトラのリアウ州、ジャンビ州、および南スラウェシ州へ移住した人口を出生地別にまとめたものである。これらの州へのジャワからの移住者の中には政府援助による移住者の他に相当数の自発的移民も含まれている。スラウェシから南カリマンタンや東スマトラへ移住した移住民の大部分は、南スラウェシ州からのブギス族で、彼らの大部分も自発的移民と判断される。また、表2には州内での移住が集計されていないために、州内から開拓空間へ移住した人口を知ることはできないが、その数も相当数にのぼっている。彼らもまた、政府の移住政策に頼らずに開墾に従事

する自発的移住者である。

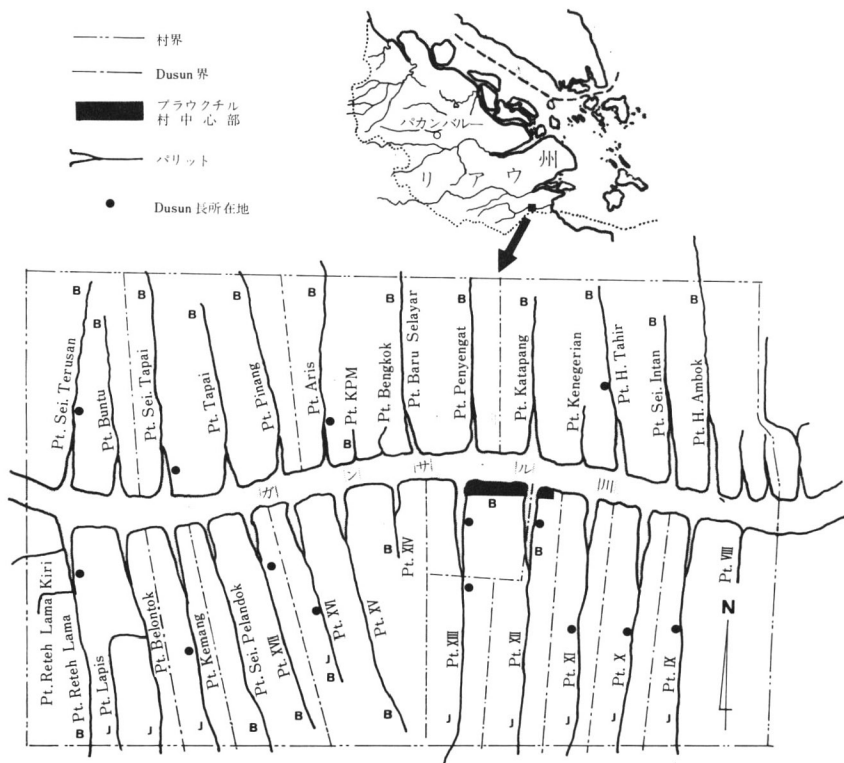
以上のように、島嶼低湿地は、島嶼部に残る最後の広大な未利用地として、外部からの移住者を受け入れる開拓空間となっている。移住者の大部分は、成熟した農業空間をあとにして、まったく異った環境下に入植、定着を試みようとする農民である。彼らのなかには、自分の所有する農地を求めて移住する土地入手型移民が多いが、まとまった資本を元手に養魚池造成やプランテーション開園を目差す開発型移民も少なくない。このような移住者がどのような過程を経て開拓空間に定着し、適応していくのか、リアウ州および南スラウェシ州の低湿地の事例を以下にみることにしよう。

## II リアウ州東部低湿地の開拓空間

### 1 調査地の概要

スマトラ島の中央部、バリサン山脈の東麓からマラッカ海峡にかけて位置するリアウ州は、総面積が9万4562 km<sup>2</sup>で、スマトラ第二の大きな州である。しかし、総人口は約216万8000人(1980年センサス)にすぎず、スマトラではもっとも低い人口密度(23人/km<sup>2</sup>)となっている。人口の大半は、バリサン山脈からマラッカ海峡へ東流する大河川(Rokan, Siak, Kampar, Kuantan-Indragiriなど)沿いかマラッカ海峡の島々に分布し、その他の地域、とくに同州の東半部には広大な湿地林がひろがって、人口はとくに稀薄である。

筆者が調査した地域は、同州の最東南端部、インドラギリヒリル(Indragiri Hilir)県のガンサル(Gangsals)川下流に位置するルテー(Reteh)郡プラウクチル村(Desa Pulau Kecil)である(図3参照)。ガンサル川下流域では、他の大河川の下流域と同様、河口部にはマングローブに覆われた汽水性低地がひろがり、河口から約20km遡ると川沿いに河成沖積地があらわれる。この沖積地の幅は、両岸約1~2kmで、その奥には泥炭地がひろがる。プラウクチル村は、河口から約25km上流に位置する。ガンサル川下流は、リアウ州の河川が総てそうであるように、感潮河川で、大潮のときには同村付近で3m



図中Jはジャワ人が、Bはブギス人が主に住むパリットを示す。

図3 ブラウクチル村の位置と同村のパリット（概略図）

余の河川水位の干満差がある。河岸から約1~2kmの間（この部分は laut と呼ばれる）には水田（約2100ha）が、そしてその奥（darat と呼ばれる）には、泥炭湿地林を開いたココヤシ園（約7000ha）がひろがる、稲作とココヤシ栽培を生業の中心とする農村である。

村の人口は8361人（1983年）で、村長によると、その50%がブギス、40%がジャワ、そして残りが南カリマンタンから移住したバンジャール、西スマトラからきたミナンカバウ、もともとこの地域に住むムラユー、および中国人である。この民族構成からわかるように、村民の大部分は、移住民およびその子孫である。もっとも初期の移住者は1925年頃にジョホールから入植したジャ

ワ人で、バンジャールが1930年頃、ブギスが1935年頃から入植し始めたという。入植者達はガンサル川から内陸部へ向けてまずパリット (parit : 水路) を掘り、水田やココヤシ園を開きつつ、さらにパリットを延長して内陸部の開墾を進めていった。現在、プラウクテル村には32のパリットがあり、そのうち28のパリット沿いにジャワ、ブギスの移住者が定着している (図3参照)。村の中心は、同村のほぼ中央部、ガンサル川の右岸に位置するタンジュンパタパック (Tanjung Petapak) のパサールで、若干の商店、ココヤシの製油工場、精米所などがあり、約160世帯が集住している。

## 2 移住者による開拓の過程：潮汐灌漑水田とココヤシ園の開墾

筆者が実際に踏査したガンサル川右岸の Parit X から Parit XVII までの地域で得た聞き取り調査にもとづいてこの地域の開拓の過程を再現してみよう。ちなみに、現在、これらのパリットのうち、Parit X, XI, XIII にはジャワ族が、XIV, XV, XVII にはブギス族が、そして Parit XII と XVI には両者が主に居住している。

移住者達が入植する以前、この地域にはムラコ族が居住していた。彼らの生業は、沿岸部での漁撈と河川沿い沖積地での焼畑移動耕作による稲栽培で、他に森林産物の採集や、今世紀初めからはゴムの栽培などを行っていた。移住者が入植したとき、まずとりかかったのはパリットの開削である。例えば、Parit XI の場合、何年か定かではないが、最初はジャワ人とブギス人が共同で開削にとりかかったという。ガンサル川から約1 km 内陸部へは Sungai Bakau と呼ばれる自然の濬筋みおがあったので、その濬筋をそのまま利用して、そこからさらに内陸部へ向けて約1 km を掘削した。パリットを掘削すると、その両側にラダン (ladang) を開き、水稻を栽培した。1942年に現在の水路長 (kepala parit) がこのパリットに移住してきたときには、ブギスの家が10戸、ジャワの家が5戸あったという。その後、最初の開削を指揮したジャワ人が中心になり、さらにパリットを1 km 延長した。そして、さらにジャワ人が多数移住してきたため、現在の水路長が組織者となり、1953年以降、内陸部へ徐々にパリットを

延ばしていき、彼のもとでさらに 3.5 km 延長されたという。パリットが内陸部へ延びるにつれて泥炭地となっていく。泥炭地では、パリットが開削されるとココヤシ園が開かれた。まず両側の湿地林が開かれ、火入れされる。その後放置され、その間に生長してきた二次植生を2年目にもう一度伐採、火入れする。火入れの後は小水路 (parit anak) の掘削である。これは、パリットと同じく、排水と運搬のために掘られるもので、パリットに直角に約 30~40 depa (1 depa は約 1.7m) の間隔をおいて掘られる。こうして準備されたところにココヤシの苗が新植される。現在、このパリットは総延長 6.5 km で、いまなお内陸部へ向けて延長されつつあり、ココヤシ園の拡大が進んでいる。当初10戸あったブギス人達は、1950年代から他所へ移り始め、1982年には最後のブギス人もこのパリットを出ていったので、現在このパリットに住む66世帯、374人は総てジャワ人で、完全なジャワ人のパリットとなっている。

隣りの Parit XII は1930年代初めにバンジャール人によってまず開削されたという。このとき、ガンサル川から内陸部へ向けて 900 depa のパリットが掘られた。次に、1950年代にブギス人が組織者となって、さらに 1100 depa 延長された。1960年にはジャワ人が組織者となり、1800 depa、そして1973年と1976年にもジャワ人が組織者となってそれぞれ 150 depa と 750 depa を延長した。パリットを開削した後は、Parit XI と同じく、laut ではラダン (水田) を、darat ではココヤシ園を開いた。最初にこのパリットを開いたバンジャール人達は、その後ガンサル川のさらに上流部へ移住した。また、入植当初、川岸から内陸部へ約 2000 depa のところまでパリット沿いに散在していたブギス人は、入植地の治安が乱れたため1960年代にはココヤシ園内での居住をやめ、laut 側に集住するようになった。いまは、このパリットの下流部にはブギス人が、上流部にはジャワ人が住んでおり、もともとブギス人が住んでいた中流部は、彼らの所有するココヤシ園があるだけで、まったくの非居住地となっている。

次に、ブギス人が開削したパリットの例をみてみよう。Parit XV がいつ最初に開かれたかは定かでない。1950年にいまのパリット長がジョホールからここに移住したときには、すでにブギスの移住者が2戸あったという。先に移住

していたブギス人や、もとからここにいたムラユー人によって約 2 km のパリットが掘られており、その両側には、ココヤシが植えられ、ところどころ昔に植えられたゴムの木が残っていた。その後 1950 年代後半に南スラウェシヤマレー半島、その他から多数のブギス人が移住してこのパリット沿いに住みつき、ココヤシ園をラダンに変えて水稻を栽培した。1957年頃にブギスの入植者がもっとも多くなり、その戸数は 42 戸になったという。ブギス人の入植につれて、パリットが延長され、さらに水田が開かれるとともに、内陸部では、ココヤシ園が造られていった。現在、このパリットの総延長は約 4.5km となっている。これらブギス人はパリットの延長とともにココヤシ園に住むようになったが、1960 年代後半から徐々に laut 側に出てくるようになった。治安の悪化や、交通の便のために内陸部から移り住んだという。また、ココヤシ園を他のブギスに売ったり、あるいはそれを所有したままで、同村のパサルや郡の中心地であるブラウキジャンへ居を移すものもでてきたため、いまこのパリットには 20 戸のブギスが残るだけである。上流部はココヤシ園だけで人は住まず、中流部にはコプラを製造する加工場 (langkau) とその所有者達が住むだけで、大部分は、laut 側のパリット沿いに集まっている。

Parit XVI や XVII も Parit XV とよく似た経過をたどっている。ここでも、かつて内陸部に住んでいたブギス人は、他へ移り住むか、同じパリットの laut 側に家屋を移築して集住するようになっている。Parit XVII の場合は、1982年にこの村の幹線道路が完成すると一斉にこの道路沿いに居を移し、いまでは整然とした列村を形成している。

ブギス人の再移住に伴って、水田やココヤシ園の請負いや小作が増えてくるようになった。たいていの場合、ブギス人が自ら開墾した土地を手放すのは稀で、彼らは、ジャワ人に水田の耕作やココヤシの収穫をまかせ、刈り分け小作させるのが一般的である。Parit XVI では、このようなジャワの小作人数が稲作期間中にパリット沿いに出作り小屋を建て一時滞在している。小作人達は、同村のジャワ人のパリットから来ていたり、隣村からも来ている。なかには、そのまま小作人として定住する者もあり、Parit XVI のように、もともと 30 戸あ

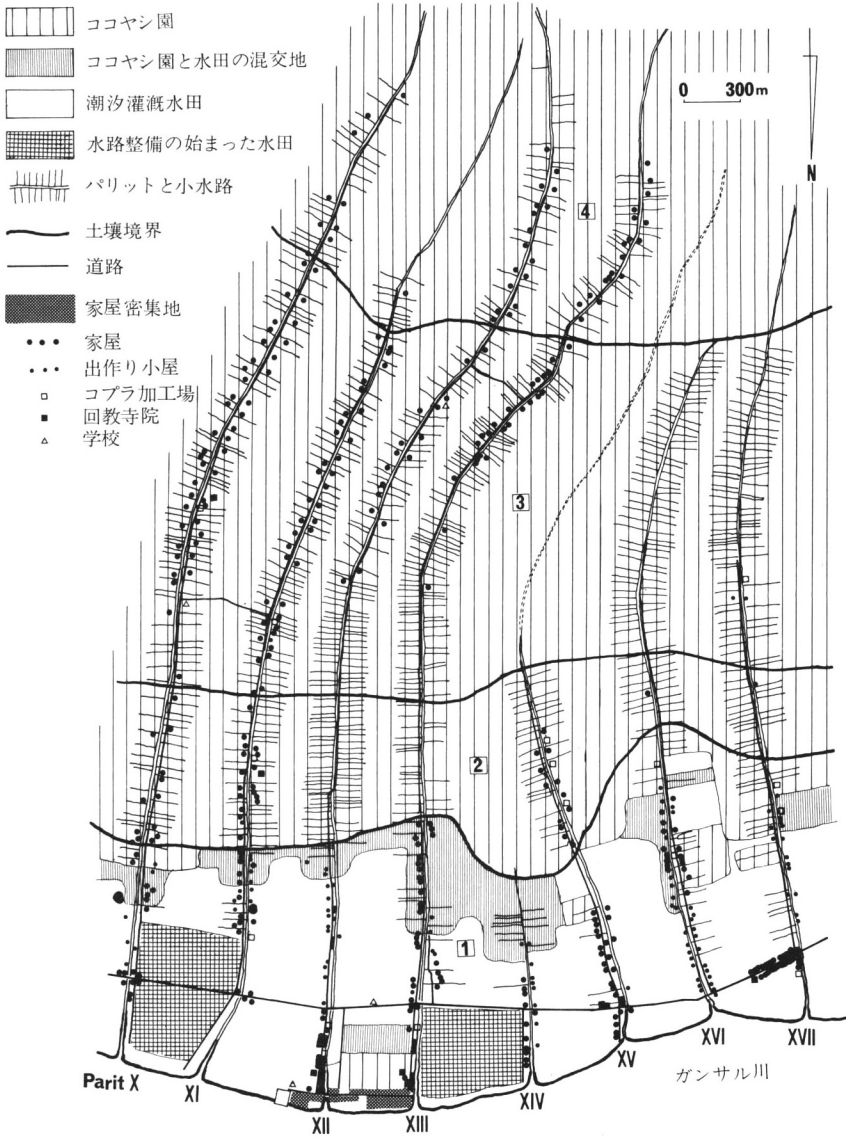
ったブギスの家がいまでは10戸に減少したのに対し、ジャワ人の小作人定住者が11戸と、数のうえではすでに先住者を凌駕するほどになっている場合もある。

ジャワ人やブギス人の移住者の開拓の過程は概ね以上のものであった。彼らによって開削されたパリットや開墾された耕地、そして彼らの住居分布などの概況を示したのが図4である。どのパリットでも、川岸から約1km余には水田が、そしてその奥ではココヤシ園が開かれており、土地利用のパターンは、各パリットで共通しているといえよう。すなわち、沖積地 (tanah liat) は水田に、泥炭地 (tanah gambut) はココヤシ園に利用される。

水田耕作の方法は、ジャワ人のものもブギス人のものも同じである。水田は、いわゆる潮汐灌漑水田 (sawah pasangsurut) で、雨季に増水した河川の水を、満潮時の水位の上昇とともにパリットから水田に灌漑する栽培法である。栽培は年1回で、道端や庭先に作られた第1苗代 (samir) で1週間育苗された苗を本田内の第2苗代 (lecak) に移し、それをさらに1カ月後に本田 (ladang) に移植する。本田準備は、密生した雑草を山刀 (parang または tajak) で根元から刈り、刈りとった草を何度か反転させて腐らせるだけである。鋤や犁による耕起はなされず、腐った草をそのままにして、あるいは畦に積みあげて本田の準備が整うと、lecakで50~60cmの丈にまで大きくなった苗が植付棒 (tegal または tanjang) で移植される。本田移植後は水田内の湛水を続けて、雑草の発生を抑えるだけで、除草や施肥などの肥培管理は行われない。

成熟した農業空間で集約的な稲作を行ってきたジャワ人やブギス人にとって、この栽培法はいかにも自然まかせの粗放な稲作と映ったに違いない。鋤や犁で丹念な耕耘を繰り返し、水田をできるだけ高度に利用しようとしてきた彼らにとって、常に潮位運動によって水田内の水が出入りし、水管理が困難を極めるこの種の水田は、彼らの経験にある水田とは全く異質の耕地として映ったに違いない。泥炭地のココヤシ園にしても、彼らの故地では全くみられないもので、初期の移住者にとっては、この環境に適應することは、総てが新しい試みであったに違いない。このような彼らに、適應の手本を示したのがバンジャール人である。南カリマンタンの低湿地では、古くから、ここで行われているのと同





図中、1は沖積地 (tanah liat), 2は沖積土と泥炭土の混交地, 3は分解の進んだ泥炭地 (tanah gambut hitam), 4は新たに開墾されつつある泥炭地 (tanah gambut merah).

図4 ジャワ人、ブギス人入植地の概況 (Parit X~Parit XVII)

様な、潮汐灌漑水田とココヤシ園を組み合わせた低地開発がおこなわれてきた [van Beusechem 1939:2-7]。同地へ移住したジャワ人やブギス人がこの開発法を習い [Collier 1980:25-32]、リアウ州へこの方法を携えて再移住したことであろう。また、初期の移住者が、すでにこの地に移住していたバンジャール人移民から直接この方法を学んだとも推察される。リアウ州東部低地の初期の開拓は、このようなバンジャール人の農業を手本に、成熟した農業空間からの移住者が主たる担い手となって行われたものといえよう。

### 3 適応のかたち

島嶼低湿地に移住してきたジャワ人やブギス人は、環境の農業的利用においては、いずれも潮汐灌漑水田とココヤシ園を開いて定着したように、その適応の初期には差異がみられなかった。しかし、図4に明らかなように、ジャワ人が主に居住するパリットと、ブギス人が主に居住するパリットでは、居住のパターンが随分異なっている。パリット沿いにどんどん奥地へと延びるジャワ人の集落に対して、ブギス人の集落は、逆に laut 側に集中している。すでに述べたように、ブギス人の場合には治安の乱れが契機になったとはいえ、それが安定してからも darat から laut へという移転が続き、いまでは両者の間で完全な環境の棲みわけが認められるほどになっている。

ジャワ人達は、彼らの居住について、次のようにしばしば語る。すなわち、彼らにとっては水田とクブン (kebun: 園地) を所有し、そのクブンの中に家を建て、屋敷地に様々な果物や花、野菜を植えるのが理想の住み方である。ジャワからこんなに遠くまで移住してきたのも、何にもまして自分自身で耕作のできる土地を手に入れたかったからである。すなわち、彼らは根っからの農民 (petani) である、と。一方、ブギス人達の居住観はこれと異なる。彼らにとっても水田やココヤシ園を持つことは定着するうえでのまず第一の目的である。しかし、いったんそれを手に入れば、そこからあがる収益を利用して、さらに土地を拡げたり、農業以外の部門に進出するのがかしこいやり方である。土地をなにも自分で耕やさなくても、例えばジャワ人やまだ十分な土地を持って

いないブギス人に貸せばよいではないか。お金がたまれば、不便な *darat* に住まず、それを有効に利用できる、もっと交通の便のよいところ、あるいは人の多く住むパサールに移り住むのは当然のことではないか、というのがブギス人の一般的な考えである。そして、このように語るブギス人も自分達は農民であるという。

すでに述べた水田やココヤシ園の小作関係をみても、両者の間には、農業における民族間差異とも呼びうるほどの違いがあるといえよう。また、水田耕作に対する両者の取り組みをみても同じことが指摘できそうである。例えば、前述した粗放な潮汐灌漑水田を、水門と水路の改良によって、安定した水管理の可能な水田に変えようとする計画がいま進行しているが、この計画に対してジャワ人は極めて積極的である。図4に示したように、この計画の実施地域がジャワ人の主に居住するバリットであることからこのことをうかがうことができる。さらに、個人のレベルでも水田の高度利用を図ろうとする者がいて、彼らは、水田内に細かく水路をめぐらして水管理を精緻にし、水稲と乾季の畑作物栽培との二毛作を試みようとしている。耕地に対するジャワ人移住者のこのような強い執着をみていると、たしかに彼らが根っからの農業者であるという印象を強くする。そして、環境は違っても、ジャワの農村と同じような水田を作り、同じ生活をここで続けようとする彼らの意図が、現在の適応のかたちとしてあらわれているように思える。しかし、一方のブギス人をみると、彼らの適応のかたちはジャワ人のものより一層柔軟なようにもみうけられる。彼らは、南スラウェシで行っていた彼ら自身の農業を環境の全く異なるこの低湿地へ移植しようなどとは考えていない。むしろ、この環境にもっとも適した農法をいち早くとりいれて、その上で彼ら自身の理想とする様々な経済活動へと進出している。当初の適応の仕方が両者の間であまり変わらなかったのに、結果的には、これほどまでに適応のかたちが違ってきたことは、環境と開拓者との関係を理解するうえで興味深い点である。この点をもう少し詳しく考えるために、いまひとつの事例として、南スラウェシ州のルウ県の場合を次にみてみよう。

### Ⅲ 南スラウェシ州ルウ県低地の開拓空間

#### 1 調査地の概要

南スラウェシ州の北東端、ボネ湾の最奥部に面するルウ県は、1950年から1965年にわたるカハル・ムザカルの内乱により深刻な影響を受けたため、同州ではもっとも開発の遅れた地域となっている。戦前には植民地政府により移住政策の入植地がルウ県の東部に開かれたが [Maurenbrecher 1939:21-25]、この地域の本格的な開発が始まるのは、内乱の終息した1965年以降のことである。隣県のタナ・トラジャや同州中南部の諸県からトラジャやブギスの自発的移民がまず入植し始め、1969年からは政府の移住政策による入植者が、ジャワ、バリ、ロンボクから毎年送りこまれるようになった [田中1982:65-69]。

筆者が調査したのは、これら移住者が集中しているルウ県の東部、ウォトゥ (Wotu) およびマリリ (Malili) の両郡である。郡統計によると、1983年のウォトゥ郡の人口は3万4950人で、うち7889人が移住政策による入植者とその家族である。また、マリリ郡では、郡人口2万5443人の約半数に近い1万1656人が入植者で、統計にはあらわれてこない自発的移民を含めると相当数の移住者がこの地域に流入している。移住者達が入植する地域は、かつて原住民 (Orang Pamona) によって焼畑耕作が行われていた未利用地で、パンチェ (*Nuclea orientalis*) やスギマナス (*Anthocephalus cadamba*) などの二次林がひろがる低湿地である。この低湿地をはさんで、北側には森林に覆われた山地や丘陵地がひろがり、南側にはマングローブやニッパの生える汽水湿地林がボネ湾まで続いている。

政府の移住政策による入植者は約500家族を単位にひとつの入植地に定着する。移住地は政府により前もって開墾されており、1家族あたり水田1haと畑0.75ha、屋敷地0.25haが与えられる。自発的移住者は、移住後、郡長により指定を受けた入植地の開墾に自力でとりかからねばならない。普通は1家族2haを限度としているが、それ以上の土地を開墾している者も少なくない。入

植地が固定されている移住政策による入植者に対して、自発的移住民の開拓地は、丘陵地から汽水性湿地に至るまで広範囲に分布しており、彼らの定着の過程は地域により、また民族の違いにより変化に富んでいる。

## 2 移住者による開拓の過程：水田、園地の開墾と養魚池の造成

ウォトゥ、マリリの両郡に自発的移住者が数多く入植し始めるのは1970年代後半に入ってからである。次頁図5に示した、ウォトゥ郡レウォス (Lewonu) 村、マナンガル (Manangalu) に自発的移住者が最初に入植したのは1976年で、木材伐採の労働者としてこの地域に出稼ぎに来ていたブギス人が数家族まず定着したという。マナンガルにはもともと原住民のパモナ人が住み、焼畑耕作やサゴの採取、森林での籐の採集などを生業としていた。最初に入植したブギス人達はパモナ人の集落のさらに奥地の丘陵地を開き、初年目にはトウモロコシ、2年目からはトウモロコシと陸稲を栽培し、同時にバナナや丁子 (cengke) の苗を植え始めた。まず焼畑耕作と同じやり方でラダンを開き、最終的にはそれを丁子園にしようとする開拓法である。当時、丁子の価格が非常に良かったので、ブギス人入植者のほぼ全員が丁子栽培にとりかかったという。最初の入植者達が定着してから、彼らを頼って多数のブギス人がここに移住するようになった。同郷の者呼び寄せたりして、いまではパモナ人の36戸を上回る45戸のブギス人入植地が形成されている。

ジャワからの自発的移住者がここに入植し始めるのは、1977年以降である。ジャワからの入植者達もまずラダンを開き、トウモロコシや陸稲、キャッサバを栽培した。しかし、彼らの場合丁子を植える者はなく、ラダンでの畑作物栽培を続け、一方で政府入植地の水田へ刈り分け小作に出る者が多かった。投機的な丁子栽培に手を出すよりも、食糧となる普通畑作物の栽培を続け、ラダンの状態の耕地を永続的な常畑へ変えていくのがジャワ人の一般的な開拓法である。なかには、刈り分け小作をする水田のある集落へ再移住する者もあり、最多時で25戸を数えたジャワ人入植者は、いまは19戸に減少している。

マナンガルに入植したブギス人とジャワ人は、どちらもトウモロコシと陸稲

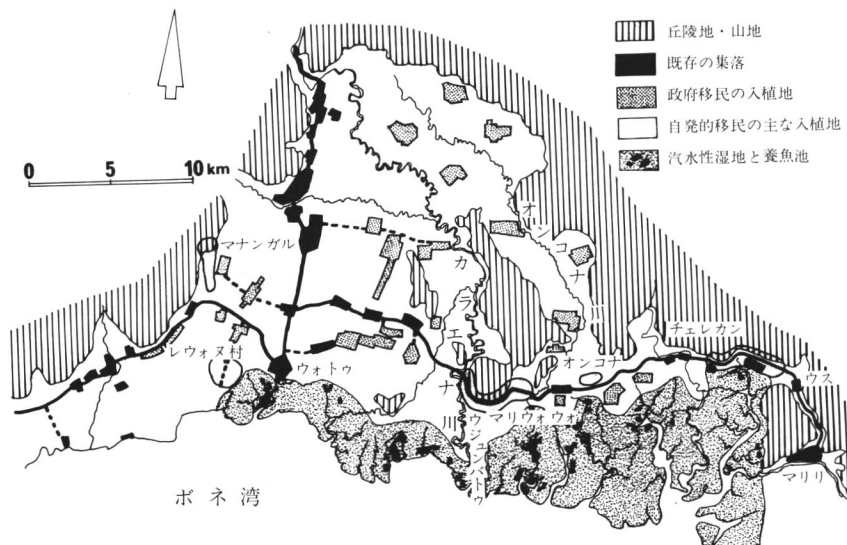


図5 ウォトゥ，マリリ両郡の入植地の概況

などの畑作物をまず栽培するが、ブギス人の場合は、そうして開墾した畑を商品作物の栽培によって収益の上がる耕地に変えていこうとする。一方、ジャワ人は、開墾した畑でまず食糧を確保して、その畑で続けて生産を維持、向上させようとする耕地にするために、営々とその耕地を耕していく。全く同じ環境に入植していても適応の仕方には随分と開きがあるようである。ところで、当初ブギス人が手がけた丁子の栽培は、病害や肥培管理の不手際のためにほとんどが失敗している。そして、筆者が3度目にこの地を訪れた1985年には、ブギスの入植者達はカカオの新植に忙しかたち働いていた。丁子が駄目だったので、今度はカカオだというわけである。こういった商品作物の苗を入植者達におろしているのは、定期的にこの地域を回っているブギスの商人である。彼らからの情報に敏感に反応しながら、ブギス人達はこれからも商品作物の栽培を続けていくに違いない。

次に、ウォトゥ郡とマリリ郡の境界であるカラエナ (Kalaena) 川からオンコ

ナ (Angkona) 川に至る、マリリ郡タンピンナ (Tampinna) 村のウジュンバトゥ (Ujung Batu) とマリウォウォ (Maliwowo) に入植したブギス人とトラジャ人の事例をみてみよう。両河川の間にはウォトットとマリリを結ぶ道路が通っているが、かつては集落が全くなく、深い森林に覆われていた。カハル・ムザカルの内乱のときには、この道路も寸断され、ほとんど人が寄りつかなかったという。この地域に最初に住みついたのは、もとカラエナやオンコナに住み、反乱軍に入って村を出、内乱の鎮圧後村に戻ってきたルウ土着のブギス人である。この道路沿いに定着した彼らは、まず湿地林を伐開し、サワー・ラダン (sawah ladang, 焼畑水田) と呼ばれる水田を開いた。サワー・ラダンとは、まだ通常の水田の機能を持っていない、一見したところ焼畑とかわらない耕地であるが、水稻を栽培するところからそのように呼ばれている [田中 1982: 87-89]。耕地を開いたときには、草木の根がからまった芝土状のマット層が表層に厚く堆積しており、水稻の植付準備は山刀でその層を切り刻むだけである。こうして毎年水稻の栽培を続け、その耕地を通常の水田に整えていくのが、この地域での低地の開拓法である。

ルウ土着のブギス人がこのようにして開拓を始めたが、1970年代前半までは、この地域に住む土着のブギス人もほんの数える程度であった。他の県から移住者が入植し始めるのは、ここでも70年代後半からである。まず入植したのは、ウォトットやマリリへ行商に来ていたブギス人である。行商の途次、この地域を通過していた彼らが、ここにまだ広い未利用地が手つかずのまま残っているのを知って、低地で水田を、そして山腹で丁子園を開墾するために入植し始めたのが最初である。その後、78年頃から多数のブギス人が入植するようになってきた。ちょうどこの頃、政府によるルウ県東部の開発事業のためにこの地域へも多数の人間が外部から出入りするようになっていた。また、ウォトットとマリリを結ぶ道路の改良や、カラエナ川やオンコナ川の橋の建設などにより、この地域の交通はこの頃に飛躍的に便利になった。ブギス人移住者の大量の流入は、これら様々な開発事業の進展と軌を一にするものであった。タナ・トラジャからの移住者が入植し始めるのも1970年代終りからである。ブギス人とトラジ

ャ人の移住はいまま進行中で、カラエナ川とオンコナ川との間には、ブギス移住者が68戸、トラジャ移住者が同じく68戸入植しており、土着のブギス人は25戸と圧倒的に外部からの移住者が多数を占める地域となっている。

入植したブギスやトラジャの自発的移住者達は、大部分がウォトゥとマリリを結ぶ道路沿いに住居を建て、低地での開田と山腹斜面でのクブンの開墾にとりかかる。ブギス人は低地でも比較的高みの部分の開墾を好み、開墾当初はそこでトウモロコシや陸稲を栽培する。そして、表層の有機物が分解するにつれて、畦を造成して耕地を区画し、徐々にそれを水田に変えていこうとする。まづラダンを開き次にそれを水田に変える開拓法である。水が十分でないときには、その耕地を畑状態のまままで耕作し、トウモロコシと陸稲の栽培を続けていく。一方、トラジャ移民は、低みの開墾を好み、当初から水稻を栽培して一気に水田を開いていく。土壌はまだ芝土状で、伐木の株跡や焼け残った倒木が耕地一面に散らばっているが、常に滞水しているので、水稻の栽培が可能である。開墾後2,3年すると畦を造って水田を区画し、徐々に普通の水田らしい外見が整えられていく。ブギスの開拓法が二段階であったのに対し、トラジャのものは直ちに開田するところが特色である。

山腹斜面の利用法にも両者の間で違いがある。ブギス移民の場合、前述したマナンガルのブギスと同じく、クブンの開墾は主に商品作物を栽培するためである。1970年代末から80年代初めには、ブームとも呼べるほどの丁子園の造成が彼らによって行われたが、ここでも丁子の栽培はうまくいかず、いまはカカオの新植が盛んである。これに対して、トラジャ移民のクブンは自給のための様々な作物を栽培するために開かれる。果樹類やバナナ、キャッサバ、サツマイモが多く、とりわけバナナがたくさん植えられて、この一部が販売される。彼らのクブンは、すでに述べたジャワ島の屋敷地と同じ役割を担った園地であり、トラジャ人の入植地の背後にはすでに相当大きくなった果樹類やバナナの林がひろがっているのが一般的である。

ところで、この地域に入植したブギス人の多くが木材の伐り出しに従事している。オンコナやカラエナの土着のブギス人集落には仲買人が居て、ブギス入



植者の伐り出した材を買いつけてくれる。また、州都ウジュンパンダンからトラックで直接この地域に買いつけにくる業者もいて、ブギス移民のなかには伐り出しを専業とするものが出てくるほど、伐採が盛んになっている。トラジャ人は伐り出しには従事しない。彼らがこれに関わるのは伐り出された木材をトラックに荷揚げするときだけである。20人ほどがグループを作り、毎日何台となくやってくるトラックへの荷揚げで、タバコ銭程度は稼げるという。トラジャ移民が水田耕作と園地での自給的作物の栽培に力を集中しているのに対して、ブギス移民は彼らのネットワークを利用して様々な分野に進出している。

この地域に入植するブギス人のもうひとつのタイプは、汽水湿地林でエンパン (empang 養魚池) を開こうとする人達である。マリウォウォでは、オンコナ川右岸に、主に南スラウェシ州中部西海岸のピンラン (Pinrang) 県から移住した36戸からなるこの種の入植地があり、彼らはオンコナ川下流でのエンパンの造成 (図5参照) と併行しながら、入植地では水田も開いている。36戸はひとつのグループを作っており、ピンラン県でエンパンを経営していた数人が組織者となって、1981年からこの地に入植し始めた。グループの構成員は、エンパンの仕事を経験しているもと所有者や被雇傭労働者、あるいは全く経験のない農民など様々である。汽水性湿地のマングローブ林やニッパ林を伐り開き、土堤で囲った養魚池でイカン・ボル (サバヒイ, *Chanos chanos*) やエビ類を育てるこの養魚法は、南スラウェシ州で古くから行われている伝統的な方法である。南スラウェシ州では、西海岸のパンケップ (Pangkep) 県がもっとも有名なエンパン地帯で、ピンラン県のエンパンは、もともとパンケップ県からの移住者が始めたものであるという。そのピンラン県でもエンパン用地が払底してきたため、新たな適地を求めてこの地域に移住してきたのがこのグループである。

エンパンの造成は耕地の開墾と違って相当な資本力を必要とする。エンパン経営者によると、理想的とされる4haの大きさのエンパンをこの地域で造るのに、人を雇えば約350～400万ルピア (1円が約4ルピア) の経費がかかるという。土堤を造る部分の森林の伐採に50万、土堤 (川に面した大きな土堤と内部

の小さなもの2種がある) 造りに250万、土堤で囲った池の内部の伐採に20万、大小いくつかの水門に20万、そしてその他を合わせると、だいたいこのくらいになるという。入植者のなかには、ピンラン県で持っていたエンパンを売却したり、あるいはそれを入質したりしてある程度の資本を持ち、労働力を雇い入れる者もいれば、全く自力で造成作業をする者もいて、その作業の進め方はまちまちである。いずれにせよ、前述した耕地開墾を目差した自発的移住者とはいささか趣きを異にした、企業家的ともいえる移住者がいるのがエンパンを開こうとするグループの特色である。この地域の他に、隣村のマヌルン村にも同様なエンパン開発型のブギス移民のグループがいくつかあるが、ブギス人以外でエンパンを開く者はない。

### 3 適応のかたち

ウォトゥヤマリリに入植した自発的移住者の間にも、リアウ州でみられたのと同様な、適応の過程における民族間差異が認められるようである。水田の耕作に強く執着するトラジャやジャワの移住者と商品作物の栽培に意を注ぐブギス人移住者の定着の仕方はその端的な例である。

タナ・トラジャから移住してくるトラジャ人移住者はその総てが故地では土地を持っていない農民達である。彼らは、タナ・トラジャの小さな山間盆地で古くから耕作されてきた水田での水稻栽培に習熟している。この技術を生かして、タナ・トラジャにあるのと同じ水田を入植地に作るのが彼らの移住の基本的な目的である。開墾の当初は、この地域でサワー・ラダンと呼ばれる焼畑のような耕地と全く変わらない水田であるが、数年すれば畦畔を区切り、簡単な水路も作ってもっと水田らしい耕地に変えうることを熟知したうえで、彼らは入植地の選定と開墾を行っている。トラジャ人の入植地は、従って、低湿地を臨む山麓に開かれるのが一般的である。水田に近く、家屋の周りにはクブンを開くことのできるこのような環境がトラジャ人にとってもっとも好ましい立地となる。

同じように水田に執着するものの、ジャワ人移住者の水田に対する取り組み

方は、トラジャのものとは異なっている。ジャワ人の場合は自ら水田を開くよりも、すでに出来上がった水田があるならば、そこで耕作するのが自分達にはより適していると考えているようである。ジャワでやっていたのと同じように、水田さえあれば、鋤ひとつで丹念な耕作をするのは簡単なことである。幸いなことに、ウォトゥや北隣のモンクタナ郡にはオランダ時代の移民政策によるジャワ人の入植地があって、すでに立派に整えられた水田がひろがっている。また、近年の移住政策による入植地も多数あり、これらは政府計画によるものだけに、灌漑水路などの基盤整備が重点的に実施され、なかにはすでに普通の水田と同じように灌漑を伴った二期作が可能な水田もできている。ジャワの自発的移住者の大部分は、このような先住のジャワ人の入植地の水田へ請負い耕作や賃労働に出かけている。こうしてジャワ人社会との関係を取り結びながら、いずれは自作できる水田を入手しようというのがジャワ人移住者の適応の仕方である。

やり方は異なっていたが、トラジャとジャワの自発的移住者達は彼らの故地と同じような水田耕作を入植地でも続けていこうとする点で共通している。これに対してブギス人移住者のこの地域への適応のかたちは、丘陵地の商品作物栽培から汽水性低地のエンパンの造成に至るまで、前二者にくらべてずっと変化に富むものであった。入植地の環境の利用においてブギス人はこの地域のあらゆる立地に進出しているといえよう [Tanaka 1984 : 67-73]。そして彼らの開拓がブギス人の商業ネットワークに強く結びついてなされている点も、トラジャやジャワの移住者にはみられないブギス人独特の適応の仕方であった。もちろんブギス人移住者の多数が入植地において水田を開いているが、水田を開くことだけがこの地域への適応の仕方ではないことを、彼ら自身の開拓の過程からうかがうことができよう。さらに言うならば、農業だけがここでの生活の糧ではないとでも言いたげなブギス人移住者の定着の仕方のなかに、リアウ州でみられたのと同じような、彼らの柔軟な適応のかたちを認めることができるのである。

#### Ⅳ 島嶼部の農業と移住民——まとめにかえて

リアウ州と南スラウェシ州の二つの事例でみたように、開拓空間の農業はいまも激しく変化している。リアウ州の低湿地では、潮汐灌漑水田とココヤン園による開拓がなされ、水田の改良、ココヤン園の拡大が進んでいる。南スラウェシ州では、低地の水田開墾、丘陵地の園地や畑の開墾、汽水性低地の養魚池造成など、様々な開拓がいままさに進行中である。このような開拓を担っているのは、いずれも成熟した農業空間から移住してきた農民である。彼らは故地において独自の農業技術に習熟し、それを携えて入植を試みようとしているが、定着、適応の過程には、それぞれの民族間で相違が認められた。入植地において水田の開墾や水稲栽培に強く執着したのは、故地においても集約的な水稲栽培に従事していたジャワ人やトラジャ人である。一方、前二者よりも変化に富む適応のかたちを示していたのはブギス人である。しかし、彼らの場合も、ブギス社会の商業ネットワークと連関した農業を営もうとしていた点を考慮すれば、出身地の伝統とのぎざなを強く保持しつつ開拓に取り組んでいたといえよう。同じ環境のもとに移住したとはいえ、適応のかたちには各民族の農業における伝統が色濃く投影されていたわけである。

移住者の流入は、もともと島嶼低湿地で焼畑耕作などを行っていた原住民の農業にも大きな影響を与えている。定着性の乏しかった彼らの農業は、移住者の入植によって従来の可耕地面積の縮小を余儀なくされている。本稿ではふれる余裕がなかったが、例えばルウ県の場合、土着のブギス人やパモナ人のなかで、移住者にならって同じようなやり方で耕地を開き、定着農耕を始めている者も少なくない。焼畑耕作にくらべて除草に多大の労力をつぎこまねばならず、決して有利な農業ではないと考えてはいるが、政府機関による焼畑耕作の禁止や、なおも続く外部からの移住者の流入を前に、定着農耕への移行もやむをえないことと受けとめられているようである。こうして開かれた原住民の農耕地がこれからも彼ら自身によって続けて耕作されるかどうかはいまのところ不明

である。農業以外にも森林産物の採集やサゴヤシ栽培、あるいは漁撈などの昔からの生業が彼らにはまだ残されており、つぎこんだ労働に対して十分な収穫が得られないようなら、彼らが開いた耕地を外部からの移住者に売り払ってしまうことも可能だからである。リアウ州の場合は、原住民であったムラユ人の姿はジャワ人やブギス人の入植地から消えてしまっている。同じことがルウ県でも起こるのかどうか、ごく近年の開拓空間であるこの地域では事態はまだ流動的である。

本稿で紹介した開拓空間は、はじめに述べた東南アジア島嶼部の地形区分によると、いずれも島嶼低湿地の区分に入る地域である。南スラウェシ州は全体としては非火山島に区分されるが、事例としてとりあげたルウ県のウォトッヤマリリは、小規模ながら島嶼低湿地の性格を備えた地域である。東南アジア島嶼部の地形区分にたち戻って考えてみると、開拓空間への移住者の流入は、火山島や非火山島の先進的農耕民による島嶼低湿地の農業後進地域への進出であったと言い換えることもできよう。彼らの移住は、集約化された土地利用と作物栽培に関する技術と知識の移転でもある。定着の初期には、それらをそのまま入植地に移植することは困難であるが、時間の経過とともに彼ら独自の農業の型を形成していく。そしてこの形成にあずかるのがそれぞれの民族の伝統的な農業の技術と知識の体系であったととらえることができよう。

自然生態的な枠組みによって規制された伝統的な農業の多様性に加えて、その枠組みを越えて移動する農民によって様々な適応の試みがなされ、その結果、さらに多様な農業を展開してきたのが現在みる東南アジア島嶼部の農業である。本稿では開拓空間における移住者の適応の過程を述べるにすぎなかったが、島嶼部全体を通していても、環境の改変と農業の変形に果した移動する農民の役割は極めて大きいものであった。その意味において、環境と農業技術の相互作用を学ぼうとする者にとって、東南アジア島嶼部の農業は格好の素材を提供しているといえよう。

#### 参考文献

Collier, W. L. 1980. Limapuluh Tahun Transmigrasi Spontan dan Transmigrasi Pemerintah

- di Tanah Berawa Kalimantan. *Prisma*. 5 (Mei, 1980) : 12-35.
- Hardjono, J. M. 1977. *Transmigration in Indonesia*. Oxford Univ. Press.
- LBN (Lembaga Biologi Nasional). 1979. *Tanaman Pekarangan*. Bogor.
- Lineton, J. 1975. Pasompe' Ugi': Bugis Migrants and Wanderers. *Archipel*. 10:173-201.
- Maurenbrecher, L. L. A. 1939. Kolonisatie in de Palopo-Malilikustvlakte. *Kolonisatie Bulletin*. 4:21-25.
- McNicoll, G. 1968. Internal Migration in Indonesia: Descriptive Notes. *Indonesia*. 5:29-92.
- Pelzer, K. J. 1945. *Pioneer Settlement in The Asiatic Tropics*. American Geographical Society, Special Publication No. 29.
- Takaya, Y. & K. Tanaka. 1982. Selected Field Notes on Agriculture in South Sulawesi. In Mattulada & N. Maeda (eds.) *Villages and The Agricultural Landscape in South Sulawesi*: Appendix. CSEAS, Kyoto Univ.
- 高谷好一. 1985. 『東南アジアの自然と土地利用』東京：勁草書房.
- 田中耕司. 1982. 「南スラウェン州ルウ県北部への人の移動と水田農耕の技術変容」『東南アジア研究』20 (1) : 60-93.
- Tanaka, K. 1984. Agricultural Adaptation among Bugis Spontaneous Migrants: A Case Study in Northeastern Kabupaten Luwu. In Maeda, N. & Mattulada (eds.) *Transformation of The Agricultural Landscape in Indonesia*: 61-84. CSEAS, Kyoto Univ.
- van Beusechem, D. 1939. De Sawahbouw in de Moerasstreken van de Zuider- en Oost-erafdeeling. *Kolonisatie Bulletin*. 7:2-7.
- 渡部忠世；田中耕司. 1984. 「東南アジア島嶼部における耕地利用と作付体系」文部省科学研究費補助金総合研究 (B) 成果報告書；角田公正(編)『温・熱帯共通畑作物のクロッピングシステムに関する研究』: 94-118.
- 山下晋司. 1982. 「水田ミナンガ——サダン・トラジャの一枚の水田をめぐる社会人類学的覚書き——」『東南アジア研究』20 (3) : 373-392.

(田中 耕司)